



## 図書館だより

6月号



です!

## 「売れる本 売りたい本」



国語科 上田 美和

大学を卒業して2年間、出版社で書店回りの営業の仕事をしていたために、「本」と聞くとすぐに、「売れるか、売れないか」という、即物的な考えが浮かぶ。何しろ一冊すごいロングセラーが出れば、その会社は安泰どころか、東京の一等地に自社ビルを建てる事が出来るほどだったので、どこの出版社も、「長く売れる」、本を出そうとして必死であった。

営業で訪れた名古屋の駅前の書店の店長は、勉強熱心で、学研肌の方だった。売れ筋に敏感なその彼が、ある日ぼつりと言った。

「昔はね、若者が本好きで、いい本がたくさん売れたんだけど、今はマンガばかり、そんなニーズに迎合していたら、こんな本屋になってしまったよ・・・」

店長の嘆息には合点がいった。その書店は確かに非常に売りがよい店だが、書店の大半はマンガや雑誌。ライトノベルや写真集。現実と理想の狭間で、彼は寂しかったのだろう。

「本当はどんな本を置きたいのですか」と尋ねると、彼は夢見るように言った。

「・・・源氏物語」と。



仕事をやめ、教員となり、高校の図書館に顔を出した。何と良質の本が揃っていることだろう。文学全集。哲学の本。自然科学。歴史の本。若い心が震えるような。そして当然「源氏」はあった。

名古屋の書店を思い出す。彼が作りたかった本屋とは、まさしく、この図書館のような場所ではなかったか。

「源氏」の貸し出しカードには、過去の歴代の生徒たちの名が、ずらりと書いてある。

## この本読んでみませんか

「ムゲンの i 上・下」 知念 実希人 著

この本は医療・ミステリーだけではなく、恋愛・家族小説でもあります。なので、ミステリー好きははもちろん、そうでない人でも楽しんで読むことが出来ます。

突然眠りから覚めなくなってしまった3人の患者を受けもつ精神科医の愛衣は患者の夢の中に入り悪夢から開封し、患者の目を覚まさせていきます。患者が目覚めるにつれて謎が解き明かされていきます。そして、最後には私たちに大切なことを気づかせてくれます。それは、実際に読んで自分で気づいてください。

2年3組 菊永 紅彩



## 短歌へのお誘い



六月といえは思い浮かぶのは梅雨と大きな紫陽花でしょう。一年の中で唯一祝日のない月ですが、実りの秋につながる雨の時期でもあります。

『紫陽花のよひらの山(やえ)に見えつるは

葉越しの月の影にやあるらむ』

崇徳院 (すとくいん)

【意味】

紫陽花の四片が八重に見えたのは、葉越しの月影のせいだったのだろうか。紫陽花の花びらが月光によって映し出された影の幻想的な情景が浮かんできます。



# 新着図書



## 「解きたくなる数学」

佐藤 雅彦 著

数学の本なのに、出てくるのはおいしそうなケーキやチーズやチョコレートの写真。でも、それらを使って身につくのは『論理の組み立て』+『抽象化』+『新しい考え方の枠組み』+『思考のジャンプ』。

【ピタゴラスイッチ】の制作メンバー、佐藤研究室がつくる数学の問題集。

論理的思考を身につけたい社会人・大学生・高校生・中学生のみなさんへ。



## 「ピノ：PINO」

村上 たかし 著

世界初のシンギュラティ（人間の知能を超える）に到達したAI『PINO』を搭載した量産型人間ロボットのピノ。

とある貧民街に、認知症を患うおばあさんを介護するピノがいた。彼にコンピュータウイルスが侵入し、10日後に全機能が停止してしまうことに。

心を持ってしまったAIとヒトの交流を描きます。

『ボクハ・・・ボクとシテ

お母サンに愛されてみたカットタ……』



## 「源氏物語 解剖図鑑」

佐藤 晃子 著

姫君はネコで殿方はイヌで……これ一冊で源氏物語のあらすじと平安人の暮らしとキモチがマルわかり。

『源氏物語』全54帖を徹底解剖！物語の全体像を分かりやすく解説するのはもちろんのこと、当時の皇族・貴族の暮らし、風習、文化、信仰などについても詳しく紹介しています。

物語の中では熾烈な権力闘争が繰り広げられており、当時の社会情勢と比較しつつ歴史も学べるようになっています。



## 「物語フィンランドの歴史 ルト海の乙女」の800年」

北欧先進国『バ石野 裕子 著

古来よりスウェーデン王国下にあったフィンランド。19世紀にロシア帝国下、「大公国」となり広範囲な自治を獲得。ロシア革命、大規模な内戦を経て独立する。第2次世界大戦ではソ連に侵略され領土割譲。その後ナチ・ドイツに接近し、近親民族の「解放」を唱えソ連に侵攻するが敗退。戦後は巨大な隣国を意識した中立政策を採りつつ、教育、福祉、デザイン、IT産業などで、特異な先進国となった。「森と湖の国」の苦闘と成功を描きます。



## 「親ガチャという病」

池田 清彦 著

ネット発の流行語にみる「息苦しい日本」の正体！

「親ガチャ」という言葉が話題を集めています。

まるでくじを引くかのように生まれてくる子供は親を選ぶことができない。人生が上手くいかないのは「ハズレ」を引いたせいだ。

時に、そんな自虐や冷笑を含んだ思いも込められるというのが、そうした概念が多くの人々の共感を集める背景にあるものとはいったい何なのか？

日本社会の表層に浮上しつつある違和感や陋習（ろうしゅう）、問題点などに着目します。



## 「水槽の中」

畑野 智美 著

桜並木に憧れて入学した海の近くの高校で、遥は二年生の春を迎えた。親友のマーリンと過ごす毎日は楽しくて平和で、恋にも満たない気持ちで憧れの先輩を眺めている。

ある雨の日、水族館で同じクラスの地味め男子アルトと遭遇します。始業式、学食、学園祭、花火、修学旅行、球技大会。放課後に話したクラスメイトとの他愛ない会話。

誰もが大切にずっとしまっておきたい、きらめく一年間の物語です。



## 『「忘れる」力』

外山 滋比古 著

『思考の整理学』の著者が贈る、“こころの散歩”と“あたまの寄り道”のススメ

われわれは、忘却によって頭がよくなっている。忘れるのを恐れるのは誤りである。そういえば、かつてはよく忘れるのを“健忘”といい、健忘症という言い方があった。健という文字はダテではないような気がする。



## 「タラント」

角田 光代 著

こんな人生に使命は宿るのか。片足の祖父、不登校の甥、大切な人を失ったみのり。絶望に慣れた毎日が、一通の手紙から動き出します。

実家に届く不審な手紙、不登校になった甥の手で祖父の過去がひもとかれるとき、みのりの心は予想外の道へと走りはじめます。

